



令和元年度海洋水産資源開発事業 〈いか釣り:北太平洋海域〉の調査概要



調査船:第三十開洋丸(349トン)

調査期間:令和元年5月~令和元年12月

調査海域:北太平洋海域

調査の目的

アカイカ資源を効率的かつ有効に利用することを目的として、漁期の拡大および漁場の拡大の可能性について検討する。

本年度調査の主な成果等

5月から7月に行った Leg.1 の調査では、西経域において、主に冬春生まれ群の集群状況を確認した。この北太平洋東部に分布する冬春生まれ群は、昨年度の調査でその存在が確認され、今年度はその利用の可能性を検証した。しかし、Leg.1 での漁獲は商業的にみても少なく、この期間は西経域のアカイカは漁獲対象となりにくいことが考えられた。続いて7月から9月まで行った Leg.2 でも引き続き西経海域の冬春生まれ群を調査した結果、8月に1回の操業で50,000 kg 以上の漁獲がある海域が発見され、この大量漁獲が数日に渡って続いた。このことから、8月であれば西経の冬春生まれ群は十分に商業的に利用可能であることが分かった。9月から12月に実施した Leg.3 では、8月に漁獲が多かった日付変更線付近の漁場での調査を10月から開始したが、漁獲は少なかった。このことから、10月になるとこの海域のアカイカはすでに南下回遊を行っており、商業利用は難しいことが考えられた。また、本海域は低気圧が多く発生する海域であり、たびたび荒天待避を行った。その後、通常は1月から2月に利用されている三陸沖漁場を調査した。ここでは最大でも400 kg 程度の漁獲しかなく、時期的に早いことから来遊量が少ない可能性が示唆された。ただし、この海域でも、比較的漁獲が多かった海域では海洋環境が特異的であり、躍層深度が比較的深く、深度300 m の水温が非常に高いという特徴があった。この中層の高水温が三陸沖漁場の漁場指標となる可能性もあり、今後精査する必要がある。

以上の本調査の結果を踏まえて、従来中型いか釣り漁船のアカイカ操業は5月から7月までの約2ヶ月の1航海であったものが、2019年にはそのほとんどが7月の水揚げ後に再び漁場に向かい8月後半まで操業を行う年間2航海に操業形態を切り替えた。その結果、アカイカの水揚げは例年の3,000~4,000トン程度から、同年は約7,000トンと大きく増えた。今後は、より細かなスケールでの漁場形成要因を研究することによって、現場での漁場探索に役立つ知見を提供していく。

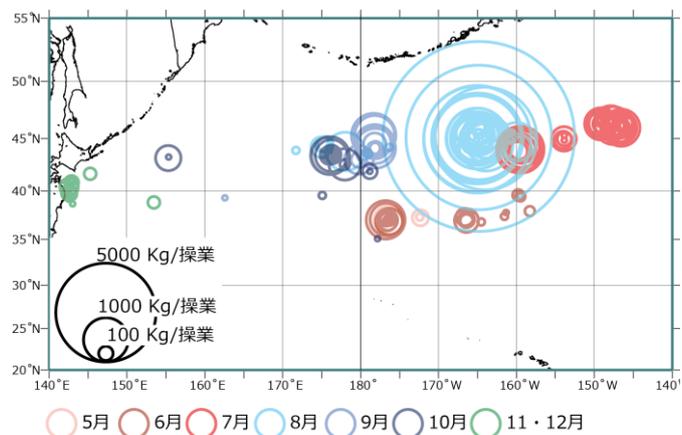


図 調査点における月ごとの漁獲量